冒険小説・ミステリー・ロマンス

J. G. カウェルティ著／鈴木幸夫訳

ADVENTURE
MYSTERY,
AND
ROMANCE

冒険小説・ミステリー・ロマンス

J. G. カウェルティ著／鈴木幸夫訳

ADVENTURE,
MYSTERY,
AND
ROMANCE

研究社出版

訳者——鈴木幸夫（すずき・ゆきお）
1912年大阪生まれ。1934年、早稲田大学文学部英文学科卒。大学院修了。現在、早稲田大学文学部名誉教授。跡見学園短期大学英文主任教授。
著書——『アメリカ現代文学』『現代イギリス文学作家論』『イギリス文学主潮』『アメリカ文学主潮』『現代英米文学の意匠』『ジョイスからジョイスへ』他。
訳書——ウルフ『波』、ジョイス『フィネガン徹夜祭』他多数。推理小説関係ではポオ『代表作選集』、ドイル『シャーロック・ホウムズの冒険』『バスカーヴィル家の犬』、ヴァン・ダイン『僧正殺人事件』、訳編評論集に『殺人芸術』、スミス編『シャーロック・ホウムズ読本』『推理小説の美学』『推理小説の詩学』などがある。

KENKYUSHA

〈検印省略〉

冒険小説・ミステリー・ロマンス
定価　四〇〇〇円
初版発行　一九八四年十月五日
訳者　鈴木幸夫
発行者　植田虎雄
印刷所　研究社印刷株式会社
発行所　研究社出版株式会社
〒一〇一
東京都千代田区神田駿河台三—九
電話（編集）二九一—一四一六
（営業）二九一—〇九五一
振替　東京七—八三七六一

落丁乱丁の場合はおとりかえいたします。

ISBN 4-327-48082-7　C 1098

はしがき

はじめに、ポピュラー文学について長年にわたって多くの示唆を与えていただいたシカゴ大学の同僚諸氏に謝意を表したい。とくに常に援助と激励はもとより、さまざまな着想や情報の提供を惜しまれなかったウォルター・ブレア、ノーマン・マクリーン、ウェーン・ブース、エドワード・W・ローゼンハイム・ジュニア、ロバート・ストリーター、チャールズ・ウェゲナー、キース・クッシュマン、アーサー・ハイザーマン、デーヴィッド・ベヴィントン、ジョン・ウォレス、ウィリアム・リングラー、ジャネル・ミュラー、シェルドン・サックス、ジェー・シュルーズナー、ジェローム・マガン、スチュアト・テーヴ、マーク・アシン、ピーター・ホーマンズ、グウィン・J・コルブ、エルダー・オールスン、ジョーゼフ・ウィリアムズ、マーリン・ボーエン、ウィリアム・スウェンスン、ケネス・ノースコット、ピーター・デンボウスキー、ロバート・ローゼンタールの各氏に感謝を捧げる。

ウィリアム・ヴィーダー氏は、大衆受けのいろいろな形式についてかずかずの貴重な着想を与えられた上、本書の草稿の多くに目を通して懇切に批評してくださった。また、探偵小説に関する部分を注意深く読んでくださったピーター・ラビノウィッツ氏にもお礼を申し上げたい。

私の知識の多くは、学界諸士ばかりでなく、学生諸君からも得るところが大きかった。二〇年間の学生名簿をここに転記することはできないから、それら諸君への謝意をこめ、とくにバーバラ・バーンスタイン、チャールズ・フリン、ランドルフ・アイヴィ、ホレス・ニューカム、スティーヴン・ウァイランド、ヴァジニア・ライト・ウェクスマン、ジョナイン・ハザード、マラキ・ウォルシュ、ナンシー・ヒュース、ケイ・マッセル、ゴードン・ケリー、スーザン・アシャー、ウィリアム・ダフィー、ゲーリ・ウルフらの諸君の名を記しておきたい。

ハロルドおよびマリリン・ボリス両氏は本書の多くの部

分についてしばしば討論に応じてくださり、あるいは共著者としてその名を掲げていただくのが当然かとも思えるほどであった。

本学以外の機関に所属する多くの方々からも、その著書によって啓発された以上にさまざまなご指導を仰いでおり、特にラッセル・B・ナイ、レー・ブラウン、マーヴィン・フェルハイム、マーシャル・フィシュウィック、カール・ボード、ジョシュア・C・テーラー、ジョージ・グレラ、アラン・M・ファーン、ジョン・レーバン、ラリー・ミンツ、モートン・ロス、リューエル・デニー、スティーヴン・B・ウッド、ロバート・コリガン、J・フレッド・マクドナルド、パトリック・モローの諸氏に感謝の意を表したい。

私の西部ものの理解については、リチャード・エチュレーン、デルバート・ワイルダー、フレデリック・マンフレッド、アレン・スリクプー、ウィリアム・スタフォードらの諸氏との会話によって益されるところが大きかったことを特筆しておきたい。

また、スチュアト・カミンスキー、ジェラルド・テマナー、スティーヴ・フェーギン、ジェラルド・ピーリー、ラルフ・アメリオ、ダドリー・アンドルー、ラッセル・メリットら各氏との会話がなければ、私の娯楽映画のジャンルについての無知ははるかに大きかったはずである。

本書にとりあげた問題に私が関心を抱くにいたったについては、二人の恩師、アリグザンダー・C・カーン、ネーピア・ウィルト両先生の影響がことのほか大きかった。また、故ロナルド・S・クレーン氏には、いつも困難な時期に激励と助言をいただいた恩義に対し深甚なる謝意を表したい。

本書を構成するいくつかの部分は、すでにさまざまな刊行物に発表したことがあり、私の考えにはじめて耳をかしてくださった『ザ・ジャーナル・オブ・ポピュラー・カルチャー』、『シカゴ大学雑誌』、『ヴェルヴェット・ライト・トラップ』、『バウンダリー21』、『インディアナ・ソーシャル・スタディーズ・クォータリー』などの編集者各位に厚くお礼を申し上げる。

原稿のさまざまな部分をタイプしてくださったジェニファー・ベル、マーシア・ベーカー、ダイアン・デュランテイ、カレン・ヴァイル、デボラ・カーランド、クリスティーン・マイクル、キャロル・サイクスの諸嬢には、判読困難な下書きを忍耐強く読みとってくださったことにつきせぬ感謝の思いを捧げる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

最後に、私のポピュラー芸術定型研究のきっかけとなった大著『ヴァージン・ランド』の著者ヘンリー・ナッシュ・スミス氏に対して、その恩義とともに、氏がただ一章を除いて私の原稿に目を通して実に貴重な批評を与えてくださったご厚意に、衷心から感謝申し上げるしだいである。同氏ならびに、惜しみなく援助と激励を与えてくださった他のすべての方々に申し上げる。本書に誤りその他至らざる点があれば、それはもっぱら私の責めに帰すべきものであるが、いささかでも美点とすべきものがあれば、それに対して貢献してくださったことにいくらかでも喜びを見出していただけるものと期待していると。

序——本書の構想

幼いころ文学にふれると、珍しいものやなれ親しんだものの持つさまざまな効用に引きこまれてしまうものである。子供は世界や人間について、物語を通して新しいことを学ぶ。定められた時間空間の限界を超越した生き物や出来事の話を聞いて、想像力の範囲を拡げたり、新たな経験や状況に対処する心の準備をしたりするのである。しかしまた、子供はなじみのあるものの与える安心感にしがみつくものでもある。新しい話をいやがって、百回も聞いた物語のほうを話してくれとせがむことが実に多い。子供はその何度も聞いた話を聞きながら、目はとろんとなり、体はくつろいで、物語が終わったときには安らかな眠りについている。おなじみになった経験、その耳に残った荒筋が再びよみがえったのだ。知りつくした支配下の空想の世界の中では、日常経験する緊張も疑問も欲求不満も、冒険やロマンスやミステリーの魔法の絵の具できれいに塗りつぶされてしまう。世界はしばし願望のままの形をとるのである。

すこし年のいった子供や大人たちは、やはりおなじみの物語に特別の喜びを見出すけれども、幼児がまったく同一の物語を楽しむのとやや違って、こんどは型通りの期待を満足させてくれる、予測のつきやすい構造を持ったある種の物語に興味を持つようになる。たとえば探偵小説、西部劇、恋愛ロマンス、スパイもの、その他多くのその種の物語である。こうした定型的作品を読むことが文学体験の大部分をなすという人は、たくさんいるものである。芸術的傑作の真面目な専門的研究に一生を捧げる学者や批評家たちでさえ、探偵がまるで儀式のように型通りに殺人犯人を追求して行くのを追ったり、テレビのスパイ・チームが危険な任務を負って難局を切り抜けていくのを見守ったりして余暇を過ごす人は多い。単行本、雑誌、映画、テレビ・ドラマなどで、こうした定型的構造に依存する作品のパーセンテージは実に大きい。してみると、こうした定型的物

語というのは、はかり知れないほど重要な意味を持った芸術的・文化的現象なのである。

その種の物語は、くつろぎや娯楽や逃避の時間と結びついたものであるところから、これまで文学研究者や文学史家たちからはほとんど無視されて、もっぱら社会学者や心理学者、それに大衆文化の分析家たちの手にゆだねられてきた。それらの学問も、さまざまな文学的定型について多くの興味ある分析を生みはしたが、たいていプロパガンダや心理的謀略や大衆の麻薬として扱ったのである。こうした接近法は芸術現象を別のことばに翻訳あるいは還元するだけで、問題を単純化しすぎてしまう。定型的物語という現象を十分に理解し解明するためには、それをあるがままのものとして、つまり楽しみや満足のために創造された芸術的構成物として扱うことが必要である。その文化的意義をいくらかでも洞察しようとするならば、まずそれを芸術行動の一形式と見なしてある程度の理解に到達すべきであろう。定型物語は広い層の人たちが受け入れている様式であり、集団的芸術行動の一形式とでも呼ぶべきものに関係するのであるから、われわれはその現象を取り扱うに当たって、そこから明らかになる文化的パターン、そしてその形成者でもある文化的パターンとの関連を忘れるべきではないし、また定型物語が文化に与える影響をも忘れてはならない。

そこで本書は、通俗物語の定型の研究、つまり大多数の読者、テレビ視聴者、映画観客などの文化的日常食の非常に大きな部分を形づくっている物語や劇の構造の研究を主目的とするのである。読者諸君にはすぐにおわかりいただけると思うが、私はこうした通俗ものの定型は、これまで解説者たちが述べてきたよりはもっと複雑な芸術的・文化的問題だと考えるのである。この一般的命題を実証するために、私はいくつかの主要な定型——探偵・犯罪小説、西部劇、ベストセラーになる社会的メロドラマなどのさまざまな形式——を選んで特に強調して取り扱ってみた。しかし私は通俗ものの定型なりジャンルなりを全般にわたって論考することはこころみなかった——すぐに気づかれるように、滑稽ものやロマンス、恐怖小説、サイエンス・フィクション、その他ポピュラーな物語や劇のたぐいで重要な分野はいくらでもあるが、これらを私は省略している。また私が分析した定型についても、完全な歴史的通観に類することはこころみていない。本書の組織原理は理論的なものなのである。私がこころみたのは、定型文学の特質と意義をより十分に検討しようとする際にわれわれが直面する

主要な分析上の問題を明示することであり、またさまざまな定型を用いて、このような問題を探求する方法を、ある程度具体的に例示することであった。かくして、私は本書が一般性の利点と特殊性の利点をいくらかずつ兼ね備えることを希望するわけである。そこから生まれる一般的方法論は、本書で取り扱った以外の通俗ものの定型にも有益に適用され得るものと私は信じる。本書はまた、ある種の主要な定型や個々の作家について詳細な個別的分析をたくさん提供するが、それはそれで、探偵小説や西部劇に類するタイプの芸術とか、アガサ・クリスティ、ダシール・ハメット、オーエン・ウィスター〔一八六〇―一九三八、アメリカ小説家〕、ジョン・フォード〔一八九五―一九七三、映画監督〕といった重要な創作家たち、さらにはこうしたタイプの文学とそれを生み出したり楽しんだりする文化との関係などについて、私同様に魅力を感じている人にとっては好個の話題を提供することになるものと期待する。

おおよその道案内として、以下にすこし本書の概要を述べておくこととしよう。第一章は定義と背景に関する章である。手はじめに、文学的定型の概念をさまざまな角度から規定するとともに、ジャンル研究、神話・象徴分析、コミュニケーション研究、社会心理学的批評など、さまざまな文学的・文化的研究のあり方と、定型研究とのつながりを述べることとなる。私はまた、芸術の大衆性という現象、芸術的表現と他の行動形式との関係、また定型の研究が必ず出会うその他の大きな難問題について多くの私見を述べるとともに、方法についてさまざまな覚え書きを提供する。特にこの第一章では、文化的神話と、第二章、第三章で詳説する物語の原型的パターンとの統合としての定型という概念を導入することとなる。

第二章は、さまざまな文化が持つ独特の物語定型の底に横たわる主要な原型パターンを定義づけるための実験的なこころみである。つまり具体的には、アメリカの西部劇、H・ライダー・ハガード式の未開アフリカ探険記、時代怪傑小説、騎士道ロマンス、民話的英雄物語など、明らかに類似した物語に共通して見られるパターンを抽出すること、またさまざまな文化に頻出する原型的物語パターンを列挙することである。

第三章は最近の『ゴッドファーザー』の人気の検討からはいるが、同じ基礎的な文化的神話――この場合は犯罪、犯罪者、探偵、警察などに集中する現代の神話群――が、どのようにすれば各種の原型的パターンと統合できるかについての、討論のたたき台のつもりである。この神話を劇

化するときの変転する物語パターンと、文化的変化とのつながりを例示することをもこころみた。またこの章では、次の四つの章の主題となる主要な探偵小説の二つの定型を、いますこし広い文化的・歴史的視野において眺め、犯罪に関する文学へのわれわれの異常なまでの嗜好という難問題を考察することをもこころみた。

第四章は、ある定型を徹底的に定義づけようとする最初のこころみである。この目的のために私は、あらゆる通俗的定型の中で最も高度に形式化し儀式化したものであるといえるであろう古典探偵小説ジャンルの根底にあるパターンをとり上げた。このパターンを構成する主要な要素と、それら要素相互間の関係とを詳細に検討し、広く全盛をきわめた時代のこのジャンルの人気ぶりについて心理学と文化論の立場から説明をこころみた。

第五章では、古典的探偵小説をいま一つの視角から眺め、その独特の芸術上の問題点と可能性について問題提起を行なった。物語定形はその時代の心理学的要求と文化的態度を反映するが、他方芸術的な限界と可能性とがあって、その処理は個々に巧妙だったり拙劣だったりする。この章ではそれら特質を明らかにするため、アガサ・クリスティのポアロ探偵ものの推理小説の成功例と失敗例を比較し、またクリスティ、ドロシー・セイアズ、ジョルジュ・シムノンらがそれぞれこのジャンルの可能性をどう取り扱ったかを論考した。

第六章では、第四章に対応するものとして、二つの密接に関連する大衆定型である古典探偵小説とハードボイルド探偵小説の比較論を展開した。古典もののジャンルの場合と同じく、ハードボイルドものの心理学的・文化的意義の追究をもこころみた。

第七章では、第五章と同じように大衆定型の芸術的可能性に関心を向ける。ここではこの問題のいま一つの側面を取り扱う。すなわち、定型が異なった芸術的水準で、かつ非常に異なった意味深長な目的のために用いられる点に目を向けたのである。この討論の基礎とするため、ハードボイルド派のうちで多くの人たちから重要視されているダシール・ハメットおよびレーモンド・チャンドラーと、非芸術派の神様的存在ミッキー・スピレーンという三人をとり上げて検討する。私はそこでスピレーンの芸術に一種の技巧性が内在していることを指摘するが、ハメットやチャンドラーの作品が高く評価される原因となっているそれとは別問題である。

文学定型がある程度長期間持続すると、移り変わる世代

のさまざまな必要や関心に合わせて、それはかなりの変化をたどるのが通例である。第八章では、そうした進化の一事例として西部劇をとり上げてその過程を分析する。ジェームズ・フェニモア・クーパーの革脚絆物語シリーズから一九七〇年代初期の西部劇映画までを検討の対象とするが、その中で西部ものの定型が、その基本要素をたえず再解釈することによってアメリカ人の移り変わる姿勢に対応してきたことを明らかにしていくつもりである。

私は定型文学のさまざまな分野を検討したわけだが、その対象のほとんどは冒険とミステリーの原型を表現する定型に関係するものばかりであったから、主としてロマンスとかメロドラマとか、怪物ないし怪奇現象とかいった原型的パターンに依存する定型の広大な分野については、十分に考察する機会がなかった。そうした分野を十分に論ずるとなると、本書は適度な限界をこえて途方もなく範囲が拡がってしまうことになろう。しかし、大衆文学のそうした分野のうち、一つくらいは検討しておく必要があろうかとも思う。そこで第九章では、メロドラマ定型の一つであるベストセラーの「ブロックバスター」(超大作)、つまり社会小説をとり上げて問題を探ってみた。この章で私は、これまでの九つの章で展開したさまざまな視角や分析方法をどうすればこの複雑な定型に適用できるかを簡潔に例示しようとこころみた。「ブロックバスター」定型の定義、その芸術性、その文化的背景や読者層との関係などについても考察し、またその展開を跡付ける方策などについても考えてみたのである。

第九章は、本書で探求したさまざまな問題の要約としても役だつはずである。結論めいたことは控えて、むしろ本書の足らざる点や限界を明らかにすることを考えた。もちろん読者諸氏は本書の短所をそれぞれにご承知であろうから、これは批判の先まわりをしようなどという意図に出たのではなくて、むしろ長年この研究をあたためてきた私としては、その長所も短所もことのほか痛感しているからにほかならない。結論部ではこのことをできるかぎり明確にしておくとともに、今後の研究のためにいくつかの提案をも行なうこととしたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

はしがき　i
序——本書の構想　v

1　文学定型の研究　3
定型・ジャンル・原型　4
定型文学の芸術的特性　8
定型と文化　24

2　文学的定型の分類のためのノート　47

冒険 51
ロマンス 53
ミステリー 55
メロドラマ 57
怪物や怪現象 62
3 犯罪の神話とその定型の具象例 67
『ゴッドファーザー』と犯罪文学 68
新しい定型の諸要素 86
通俗犯罪定型の文化的役割 101
4 古典探偵小説の定型 107
定型のパターン 108

古典探偵小説の定型の文化的背景 128

5 古典探偵小説の技法 139

このジャンルの中心的技法の問題 140
技法の失敗と成功 クリスティとセイアズ 145
ジョルジュ・シムノンの技法 162
探偵小説と他の文学ジャンル中の一要素としての謎解き 169
古典探偵小説の未来 175

6 ハードボイルド探偵小説 179

ハードボイルド探偵小説と古典探偵小説 180
ハードボイルド定型のさまざまなパターン 185
ハードボイルド定型の文化的背景 207

7　ハメット、チャンドラー、スピレーン　215
ダシール・ハメット　216
レーモンド・チャンドラー　234
ミッキー・スピレーン　249
8　ウェスタン
定型の展開についての一考察　263
クーパーとウェスタン定型のはじまり　267
『森のニック』と三文小説　288
ウィスターの『ヴァージニアン』と近代ウェスタン　297
ゼーン・グレーとW・S・ハート　一九二〇年代のロマン派ウェスタン　319
古典ウェスタン　ジョン・フォードとその同時代人　335
現代ウェスタン定型の動向
ユダヤ系カウボーイ、黒い復讐者、消えゆくアメリカ人の復帰　349

9 ベストセラー社会派メロドラマ 361
社会派メロドラマ 362
社会派メロドラマの美学 367
社会派メロドラマの発達過程 373
アーヴィング・ウォーレス 396
結論 410
原注 417
文献ノート 439
訳者あとがき 453
索引 464

冒険小説・ミステリー・ロマンス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c